

地域と大学

—— いわゆる生涯教育をめぐる ——

秋 田 清

On the continuing education

Kiyoshi AKITA

I. はじめに

今期の公開講座も、最後になりました。全体をまとめる気はありませんが、大学と地域との関わりについて、口ごろ考えていることを述べさせていただきます。地域社会研究センターというのを開設いたしましたし、「生涯学習社会」なるものについて発言しなければならない機会が出来たものですから、少し整理をしておきたいと考えたからです。

「生涯学習」、「生涯教育」、「生涯学習社会」等の言葉が飛び交っております¹⁾。カルチャーセンターの宣伝文句かと思っていたら、そうでもないようです。「短期大学は生涯教育のファーストステージ」などといわれたりします。何をやるのかと尋ねると、「教育内容の問題ではない、制度の問題だ」という回答です。内容のない制度等というものが存在しうるのか、私には

疑問です。「小学校は学校教育のファーストステージだ」という言葉に置き換えてみると良く分かりますが、ほとんど無意味な言葉です。

ここ2、3年、短期大学協会は、「短期大学は生涯教育のファーストステージ」という言葉に浮かれています。経営戦略というものは所詮そんなもので、それで、夢や希望が持てれば、実態などはどうでも良いともいえます。しかし、夢が覚めたらどうするのだろうか、余計な心配をしなくなります。所詮夢ならば、しばらく続いてほしいという気もしますが、私などがこんな心配をしないといけないほど、この戦略は危なっかしいと思います。

しかし、生涯教育や生涯学習がはやっているのは日本だけのことかと思ったら、そうでもありません。イギリスでは、adult education, further education, continuing education, education of adult あるいは professional, industrial and commercial updating 等という言葉があります。ドイツでも Weiter Bildung, Berufliche Fortbildung などという言葉が使われているのだそうです。さすがに、「生涯教育」などという怪しいものはないと思っています。lifelong education や Lebenslange Erziehung というのがチャンとあったりします。

私は、この言葉にはなんとなくウサン臭さを感じて嫌いですが、そのウサン臭さはどこから

1) 生涯学習、生涯教育という用語について、第12期中央教育審議会（1981年）の答申は次のように規定している。「人々は、自己の充実・啓発や生活の向上のため、適切かつ豊かな学習の機会を求めており、これらの学習は、各人がその自発的意志に基づいて行なうことを基本とし、必要に応じ自己に適した手段・方法を自ら選んで生涯を通じて行なうものであり、生涯学習と呼ぶのがふさわしい。そして、この生涯学習を支えるための教育制度全体を支える理念を生涯教育としている。

来るのかということ、それは教育や学習に名を借りた、あるいは元来教育や学習というものはそういうものでしかなかったという方が適切かもしれません²⁾、国家による絶えざる統合と再統合の手段として使われていると思うからです³⁾。これは「学ぶことは良いことだ」、「正しいことは皆がやるべきだ」という常識を根拠にした「生涯学習おばさん」達によって支えられています。この人たちには、「学ぶ自由」とともに「学ばない自由」というものが存在するということがまったく理解されない。何を学ぶか、何を教えるかと言うことを抜きにした学習や教育の恐ろしさはここにあります。シンポジウムなどで、こういう人たちがたくさん集まってくるのを見ていると「生涯学習ファシズム」などという言葉が頭に浮かびます。あれで、割烹着を着て、日の丸の旗でも持てば立派な「国防婦人会」です。こういう「公開講座」の場で言うのはちょっと変な気もしますが、「学ばない自由」というのを正に認めてほしいと思います。好きだから、面白いから参加しているというところでぜひ止めておいてほしいと思います。

2)たとえば、梅根 悟『教育の歴史』新評論 1961年参照。

3)歴史的に見るならば、生涯教育や生涯学習は、国家の主要な動きに対する批判として生み出されたといえるかもしれません。しかし、それが一般化し、市民権を獲得していく過程で、国家の論理によって統合され、手段化されていったというべきなのかもしれません。

黒沢惟昭「現代日本の生涯学習と市民社会」(黒沢惟昭・佐久間孝正編著『苦悩する先進国の生涯学習』社会評論社1996年。

たとえば、ジャルピ (Ettore Gelpi, 1933~) も「生涯教育は、生産性の向上や従属の教科のために取り入れられ、結果的には既成秩序の強化の具の終わる危険を内包している。だが反面、それとは異なった道を選択することによって、労働や余暇の中で、また社会生活や愛情に支えられた家庭生活の中で、人々を抑圧しているものに対する闘争に関わっていく力ともなりうる」(前平泰志訳『生涯教育—抑圧と開放の弁証法—』東京創元社、1973年)。

これが、「人生死ぬまで勉強です」とか「完全な人間を目指して」とか「自己の充実、啓発」など目的や目標の抽象化とともに、狂信的な学習者を生み出し、胡散臭いものになります。

しかし、生涯教育、生涯学習、社会教育など言葉は違いますが、世界的に見ても様々な国、時代において学校外での学習や教育が行われてきたのは、それなりに積極的な意味があるのではないかとも思います。今回は、「生涯学習社会」が語られる根拠について、大学の側から考えてみたいと思います。

II. 別府大学での取り組み

悪口を言いましたが、別府大学と別府大学短期大学部で行っております、「生涯学習」と関係があると思われる活動を羅列すれば、次のようなことがあります。講座やシンポジウムなどはすべて、学生も受講しますが、公開されておりますし、一般聴講は無料です。

①別府大学文学部公開講座

講師；原則として大学教員

②別府大学短期大学部公開講座

商経科

講師；大学教員、一般 (前期は大分県経済同友会へ依頼)

生活文化科、英語科

講師；大学教員、一般

初等教育科、食物栄養科

講師；大学教員、一般

③語学、情報講座 (英語、仏語、韓国語、中国語、パソコン基礎、インターネット)

④司書資格講座 (夏季)

⑤卒業生のための講座

幼児・児童研究センター講演会

講師；大学教員、一般

料理講習会

講師；有名ホテル、料亭調理師

⑥日田歴史文化研究センターの設置

⑦宇佐教育センターの設置

⑧地域社会研究センターの設置

⑨地域におけるシンポジウム (文学部文化財学科、史学科)

⑩大分キャンパスと挾間町との、施設、研究、研修、教育の相互乗り入れ。

⑪その他

諸研修会への講師派遣
 社会人、留学生の受け入れ
 研究生、科目等履修制の受け入れ
 放送大学地域学習センターの設置

特筆すべきことは、1985年から始めた短期大学部の公開講座で、聴講者だけではなく、講師を一般に公開したことです。現在では希ではなくなりましたが、当時は他にはなかったことです。

企業や地域で活躍されている講師を招いた時の問題として、一般の聴講者が減るということがあります。わざわざ大学まで来て、大学外の講師の話を聞いてもしょうがないということのようです。われわれは、出来合の学問を安売りしようとしているのではなく、ここで新しい知のあり方を模索してしようとしております。そのために、質疑の時間を重視しています。それにもう一つ、学外の講師が、大学で講義をやるということで張り切られて、大学の教師と同じような講義をやらうとされることがあります。生活や、企業の活動、社会の動きを一般化し、理論化したところで講義をされると、何のために学外の講師を招いたか分からなくなります。われわれが、学外講師に期待するのは、学的体系に毒されていない話、理論化してしまう前の生の事実の提示、経験にもとづく具体的な問題の提示です。学生だけではなく、われわれ教師がそうした生の事実や経験に学びたいと思っているのですが、これらのことが理解してもらえないことがあります。

Ⅲ. 「生涯学習社会」とは何か

ともあれ、以上のようなことをやっておりますが、そうしたことを、私は「生涯学習」というようなものとしては考えたことがありませんでした。それどころか、「生涯教育」だとか、「生涯学習社会」と言う言葉は何か胡散臭いと思っていました。学校卒業後の学習のことを漠然と生涯学習と言っているように聞こえます。私の専門は、経済思想史という分野に属しますが、

われわれの感覚で言えば、「～社会」というタームが使えるためには、時代を画する社会変化があったことを説明できなければならないのです。「生涯学習社会」というタームが成立するとすれば、学習（教育）という観点から見た社会が、時代を画する変化を被り、それが社会全体の変化と深く結びついていることを、説明できなければならない。そうした変化を今語りうるか、ちょっと考えてみたいと思います⁴⁾。

「生涯学習社会」になった、あるいは、なりつつあるとすれば、その前はどんな社会だったのでしょうか。言葉そのものから考えるとすれば、「学校教育社会」と言うべきものであったのかもしれない。そうであれば、学校教育が、今崩壊しつつある、あるいは崩壊してしまったということになります。

そのように考えると、「生涯学習社会」と言うのはあながち説明不可能なものではないかもしれないという気がしてきます。つまり、先進国イギリスに関して言えば200年、日本に関しては100年あまり続いてきた学校教育は今崩壊に瀕しています。それは試験制度などをいじったり、大学の学科名や科目名を変えたところでどうにかなるようなものではありません。自己点検・自己評価などと言って、小手先の改革や反省で乗り越えられるものではないとわたしは思います⁵⁾。なぜなら、現在の諸問題は、近代学校教育における失敗が生み出したものではなく、逆に、その成功が生み出したものだからです。

ここ30年くらい議論されてきたように、近

4)なおかつ、論理的に理解しなければ気が済まない、悲しい性です。

5)たとえば次のような発言はこのことを端的に示しています。

内田：カリキュラムに手を入れたり、なるべく「学問」を学生に「近づきやすい」ようにと気を配ってみたくんですが、どうもそういう学問をそのままにしておいてただそれをわかりやすくするといったことでは、本質的に解決つかない問題がある。理解力といったことではなくて、理解力をうむような問題関心それ自体の違いですね（「臨床への視座」：内田義彦『形の発見』藤原書店、1992年。P.408）。

代の学校制度を支えてきた、学問の内容そのものが崩壊しつつあります。

西洋の近代科学は主体と客体の直截な分離、実験と観察、法則の発見。発見した法則の技術化、産業化として発展してきました。人間さえも、技術や産業の一部として組み込んできました。教育は、科学の方法を身につけ、産業の一部として進んで機能しうる人間を育ててきたわけです。

学歴社会も、偏差値教育も、学校間格差や序列化も、その機能を果たすべく作られたものであって、社会が望まないにもかかわらず生じたものではないのです。それを回避しようという幻想を持って、改革しようとして意識的に様々な規定を作れば作るだけ、一層学歴社会と創造性の剥奪を進める結果になるのは、近代科学と近代社会が本質的にそうしたものを持っているからなのです⁶⁾。

「体系知の崩壊」が語られて久しいのですが、存在価値をなくした学問はその体得の程度に応じて人々に序列をつけ、支配の道具と化しているように思えます。崩壊し、葬られることなく放置された近代科学の腐敗現象である、と言えるかもしれません。

大学の崩壊は、学生の大学との関わり、就中彼らの授業態度に表れております。大学の教師達が集まると授業中学生が騒がしいことが話題になりました(今は当たり前のこととして、話題にもなりません。あるいは、学生がおしゃべりをする気力さえなくしてしまっているのかもしれません)。講義内容に対する「拒絶反応」です。10年前、初めてこの短大に来た時、1週間に1,2回しか出てこない2年生の教室は完全

6)もとより、この格差付や序列化が100%悪なのではありません。社会そのものが悪であるゆえに、その悪の一端になっているに過ぎません。教育制度は、労働力の社会的配分のための個人々の差別化を重要な社会的役割として行ってきた訳です。良く言えば適材適所。悪く言えば、差別と支配。優劣や上下関係として固定化され、対立を生み出すものとして、それは悪です。しかしすべての人間が同じ個性を持っている訳ではなく、分業社会の一端をなうという形で生きていく以上、区別は必然的です。

に社交場でした。「お久しぶり、元気？」という声が飛び交っていました。

われわれも商売ですから、90分話しに興味を持たせること、必要ならば90分笑わせることが出来ない訳ではありません。7,8年前、私は1年間、経済学の講義で、たとえ話で、笑わせることに集中したことがあります。口調や問の取り方一つで学生は実に良く笑ってくれます(それ程に、人間の行動は、見方をちょっと変えれば、こっけいだということなのかもしれません)。終いには、私が部屋に入っただけで笑ってくれます。しかも、授業に参加した学生の中の何人かは、「笑ってばかりでしたけど、笑い話の中に何か残るものがあるって、自分の生き方に影響があると思います」などといって、学期が終わった後もしばしば研究室に雑談に来ていました。

教師としては満足すべきなのかもしれません。しかし、知識としての経済学は彼らにはほとんど残らなかったと思います。「物の見方、考え方」はそれはそれで良いと思いますが、経済学の講義はやはり、知識としての経済学を含みます。経済社会の知的認識、体系知としての経済学は彼らには興味あるものとしては映ってはいない訳です。彼らが興味を持つのは「からくりの解明」としての知識ですし、しかもそれがクイズ形式で提示された時、異常な関心を示します。授業がウケればウケけるだけ、違和感を感じていました。

人間は驚き困惑した時、感動した時、自然を学び、自らの心を解きほぐす言葉と知識を生み出しました。それは人間の可能性を広げ、自らが何者であるかを確認するすべを与えました。しかし、知識は必要な時必要なだけあればいいものです。それを知ることが、何かを考えることが、楽しみである限りで、知り、考えればいいことです。人々の生活から離れ、無意味化し、たんに人々を序列付け、支配し、劣等感を与えるだけの学問など必要ないのです。生活の中で生まれ、生活を豊かにしうる感性と知恵があれば充分なのです。

こうしたことを考える時、「生涯学習」とは、

たんに、物質的生活がゆたかになり、家庭の主婦や、老人たちにゆとりと空しさが生まれたことの穴埋めや、科学技術の急速な発展について行けない労働者の再教育が必要だからやると言うようなものでは済まないような気がしてきます。それは、大学ばかりではなく学校教育制度全体の変革と不可分なものとしてあるのではないのでしょうか。

大学の崩壊は、本質的には18歳人口の減少などとはまったく関係のないところで進行しているのです。新しい知のあり方(社会の在り方)を歴史が求めているのです。

IV. 具体化の方向

私が提起したいことは、主要には学校制度として展開してきた近代の教育制度を解体し、地域生活の中から、教育というものを再構築して行く必要があるのではないかということです。べつに、直ちにすべての学校を解散し、建物を壊してしまうということではありませんが、それぐらいの決意を持って、実質的な組み替えをやる必要があるということです。

以前、文部省の生涯教育局長が来られた時、次のような話をしておられました。

①スキルの再教育 ②趣味、余暇の充実、自己実現 ③アカデミックな体系的学問

この3つを社会全体として、どのように受け持っていくのが問題⁷⁾。

今、社会的な要請を整理すると、さしあたり、このようにいえるかもしれません。ただし、その内容をどう作って行くかが何よりも重要です。

また、③は先に述べたように、すでに崩壊していると思います。常識の意味においては、新設されつつある大学院大学においては、自然科学の基礎研究という形で可能かもしれません。しかし、社会科学や人文科学の分野においてはそうしたものの成立の余地はありません。社会

7)大分県私立大学・短期大学教職員研修会。平成9年10月16日。ホテル白菊。文部省生涯学習局長 長谷川正明。

法則の発見とそれに基づく社会把握としての体系的学問は18、19世紀のもので、どこかに正しい真理がある、という幻想が体系的学問と集団的な場での教授のシステムを作り出してきました。

個々バラバラの諸個人の活動が結果として作り出す法則を発見し体系化することを通して、社会関係を明らかにするという学問体系はその基礎をなくしています。社会は組織されています。政策的に変更可能です。その意味で、真理はどこかにあるのではなく、真理は作り出すものになっています。政策を作る基準が問題です。その基準の主要なものは、人々の生活の快適さです。大切なのは、好き嫌いの感情です。

たとえば、環境、福祉、国際化が現在の社会問題として語られていますが、そうしたものを具体的に解決して行くことが必要で、教育はその中にあります。

環境問題は、単に自然環境の破壊をそれ自体として問題にするだけでは不十分です。人間の営みと自然との関係、人間が作り出した自然とその自然が人間に与える精神的な影響が問題にされています。歴史環境学などが生まれつつありますし、人々の心を癒す景観というものが問題にされています。

福祉も、たんに「障害者福祉」だけが問題なのではありません。「健常者」の福祉が問題です。ハンディキャップを持った人々との関わりの中で、ハンディキャップを持たない人々が何を得ることができるかが問題です(サンキュウボランティア⁸⁾は、そのカリカチュアです)。

8)老人ホームで、人が尋ねてくると、尋ねられた年寄りが、ボランティアに行ってきますと仲間と言って談話室に出かけるそうです。尋ねてきた人は、年寄りが、良く来てくれたありがとうと言ってくれることを期待してやって来て、ありがとうといわれて、何か良いことをしたような気になって、気持ち良く帰って行くわけです。年寄りにとってはわずらわしい場合もあるが、ありがとう良く来てくれたといえ、来た人は気持ち良く帰れるわけだから、ありがとうと言うのは、老人ホームの年寄りが出来るボランティア活動だというわけです。病院で入院患者が、見舞い客に対する応対を「接待」というようなものです。

私は、国際化というより、ボーダレス化という言葉の方が好きですが、すべてのものの境がなくなっている、古い秩序が解体しているということです。国や自治体など古い枠組みは崩壊して、ひとりひとりの人間が自由に、他の人々と関係しうようになっていくということだと思います。その自由を保障出来るほどに、社会の基層においては組織化が進んでいるということでもあります。

その意味で、人と人との交流が重要です。人と人との交流のなかから新しい関係、ネットワーク、つまり新しい社会が生まれてきます。

こうして形成される新しい地域社会（個人の生活は、地域社会を中心に行われていきますので）、の生活の一環として、教育や学習は存在する必要があります。教育や、学習を生活と分離しない方が良いのです。たとえば、学校で、普遍的理論を学ぶために、学習の基礎である生活を奪ってしまうのは、ばかげています。学生や生徒の地域との関わりを、見学や体験学習に限定すべきではなくて、かれらの活動を、地域の生活の一部として組み込むことが必要だと思えます。

昔、百姓の子供に教育は要らない、とか、大工の子供に教育は要らない、とかいわれていました。今こんな事を言ったら、差別だと言われそうですが、私は、この言葉を懐かしいと思えます。百姓の子供は親について、百姓の仕事を学び、大工は父親に学び、家業を継いでいったわけです。そこには、狭隘なものであったとしても、生活と教育、学習は一体のものでした⁹⁾。事実の問題としては、自分が教育を受けなかったから、下積みの生活を強いられたと感じ、子供にだけは教育をというのがその後進化した事態です。しかし、それがいわゆる学歴社会と大学の遊園地化、モラトリアム化を生み出しています。

近代科学は神からの開放を普遍的真理の発見

9)昔、「農繁期休み」というのがありました。農繁期には子供でも立派な働き手ですから、田植えや稲刈りの時は学校が休みになるというものです。こういうものが在った時代は、まだ、学校も正常です。

という形でやろうとしてきました。確かに、一般化や普遍化は必要ですが、それは個別の問題を解決するために必要なのです。普遍的なものは普遍的であるがゆえに価値があるというのは、神の手の上での神からの開放でしかないように思います。地域的なもの、個別的なものこそわれわれの生活の中に在るものです。これをもっと大事にした地域生活の再建の具体的展開として「生涯教育」は在るように思えます。

審議会の報告を見ていると、教育のために生活が在るのかという気がしてきます。学校教育制度を前提にし、その延長線上で、生涯教育を語っている限り、あまりにも時代の深刻さに無頓着だといわざるを得ません。

V. おわりに

もっともらしい議論をしなくても、多くの大学は定員割れで経営不能に陥るでしょうし、国立大学の私立大学化も、日程に上りつつあります。そうなった時、経営を維持できる国立大学が全国でいくつあるでしょうか。いずれにせよ、学校教育制度は、大学を皮切りに再編されざるをえません。

公民館活動や企業の文化講座、社内教育、各種サークル、予備校や塾、語学学校、専門学校等も含めて教育制度の再編は不可避です。そうした事態の経過のなかで、新しい教育制度を構築して行くことが現在の課題です。「生涯学習社会」の意味はそこにこそあるのではないのでしょうか。

私たちは、本年、地域社会研究センターを開設いたしました。この地域社会研究センターの目的として、次の3つのことを考えております。

第一は我々の研究に関係します。これまで大学での研究、とりわけ社会科学の研究は、人類の理想を目指し、そこに至る過程を体系的にとらえる、という形で行われてきました。ところが最近、学問はもっと具体的な生活のあり方、地域社会のあり方を視野に入れたものでなければならない、という問題意識が強くなってきま

した。日常の暮らしの中から学問を作り直そうという動きです。これは二番目の目的の教育にも関係します。

つまり、あたかも客観的な真理があることを前提にしたような、講義中心のこれまでのような教育は成立しないということです。それでは、学生たちの学ぼうとする意欲にこたえられない。地域の現実の生活の中から新しい学問を、教師と学生と一緒に作っていくことが求められているのです。

このことはセンター開設の三番目の目的、大学の地域社会への貢献にもつながります。地域社会の中で実践的な学問をするということは、大学の研究、教育が直接地域に何らかの貢献が出来、大学が地域社会の一部として存在するという事です。地域社会で生活する人々と共同して快適な生活を作っていくための調査研究を行う。地域の問題解決や改革の動きの中に、学生と教師がともに参加していくための組織。そんなセンターにしたいと考えています。

さしあたり、学校教育制度を前提にすれば、われわれの地域との関わりは、学生の教育、ど

のような人間を地域社会の中に育てていくか、を中心としています。しかし、われわれ教師や学生の直接的な地域との関わりは、直ちに金銭的な利害関係を伴わずに済むので、独自の価値判断で、行うことが出来ます。それが直ちに利益を上げられる事業でなくても、われわれが、社会的に意味のある事業だと判断すれば、それを援助することが可能です。環境や、福祉や、さまざまなネットワークの構築など、われわれが面白いと感じることを、勝手にやる事が出来ます。無責任な実験をやる事が出来ません。いくつかのシンポジウムで、参加者の中から、「大学が主催してくれると、他の場では言えないことを遠慮なく発言できるから良い」というような感想がありました。あちこちに気を使い、当り障りのない発言と結論に終わる役所主催の集まりと違い、「教育と実験の場」という社会的な大義名分があります。これを最大限に生かすこと、「教育と実験の場」を大学を中心に外に拡大していくこと、こうしたボランティアな活動の広がりの中に新しい地域社会が見えてきはしないかと考えております。